

# 資源回復計画推進事業

## - 小型底曳網包括的資源回復計画関連調査 -

池脇義弘・守岡佐保

紀伊水道における小型機船底びき網漁業（以下、小底と記す）による漁獲量は、昭和63年以降減少傾向にあり、平成20年度より徳島県紀伊水道海域小型機船底びき網漁業包括的資源回復計画（以下、計画と記す）が実施されている。

計画は、平成20年度から23年度の4ヶ年を実施期間とし、漁獲努力量の削減措置（小型魚保護、休漁日の設定）、資源の積極的培養措置（種苗放流）、漁場環境の保全措置（藻場造成など）を講じることにより、小底による漁獲量の減少傾向に歯止めをかけ、計画期間終了時に1経営体あたりの年間漁獲量を平成15年～17年の3ヶ年平均値である12.7トンに維持することを目標としている。とくに、小型魚保護では、ハモ、マダイで小型魚再放流サイズを大型化し、ヒラメ、マコガレイ、クルマエビで新たに再放流サイズを設定した。また、抱卵ガザミの再放流を継続実施することとした。

本事業は、計画の実施により小底の漁獲量がどのように

変化したかをモニタリングし、計画の効果を検証するとともに、目標達成のために新たな措置の追加など計画の変更が必要と判断された場合には、資源回復に効果的と考えられる方策を提案することを目的としている。

紀伊水道における小底による漁獲量変動をモニタリングするために、徳島市漁協および椿泊漁協を代表漁協として選定した。両漁協ともに、まとまった数の小底漁船が操業し協同出荷体制が整備されているため、精度の高い漁獲統計調査が実施可能である。

図1に最近10年間の小底漁獲量（1操業あたりの総漁獲量）の変動を示した。徳島市漁協では、2001、2002および2005年は約120kg/日とやや多かったが、それ以外の年は100kg/日前後で、ほぼ横ばいの傾向を示した。一方、椿泊漁協では、2000年から2003年にかけて減少傾向を示した後再び増加傾向に転じた。2000年から2003年の減少期間には、ハモの漁獲量は増加しているものの、タ

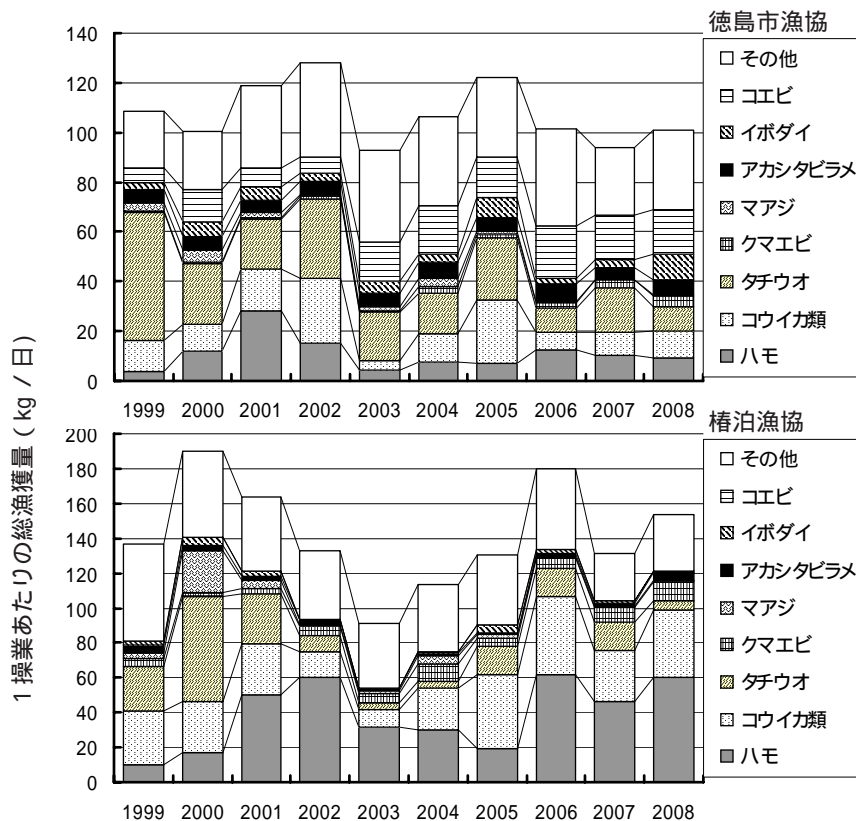


図1 最近10年間の小底漁獲量（1操業あたりの総漁獲量）の変動  
 上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協

チウオ，マアジ，コウイカ類の減少がそれを上回っており，2003年からの増加期間には，タチウオの漁獲量がやや回復するとともに，コウイカ類，クマエビ，ハモなどの漁獲増が見られた。

前述の小型魚保護の対象種について最近10年間の漁獲量（1操業あたりの漁獲重量）変動をみた（図2～6；なお椿泊漁協のガザミについては独立した魚種としての統計が整備されていないため不明）。ハモには漁獲の増減が見られるが，1999年以降出現した卓越年級群の漁獲が続いている

と考えられた。ヒラメは，2006年以降減少傾向が見られた。マコガレイ，クルマエビには減少傾向，ガザミには2005年以降減少傾向が見られた。

2008年は，まだ計画実施の初年度であるので計画の効果を評価することはできないが，とくに近年漁獲の減少傾向が見られた，マコガレイ，クルマエビ，ガザミ，ヒラメなどの魚種についてその漁獲実態を注視してゆく必要がある。

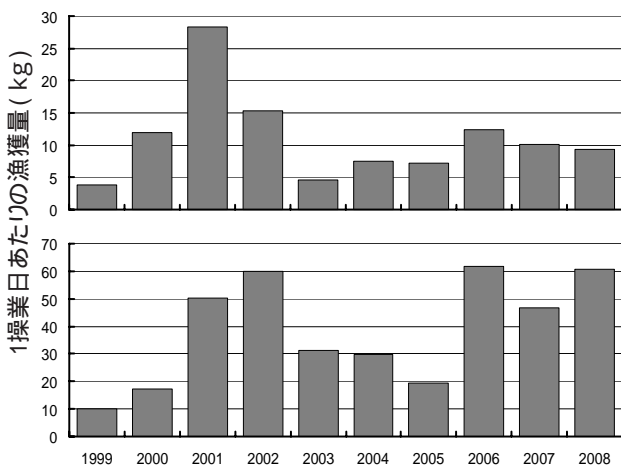


図2 小底によるハモの漁獲量変動  
（上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協）

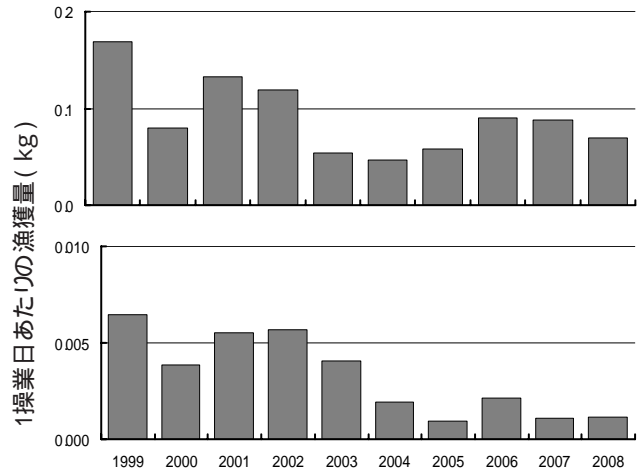


図4 小底によるマコガレイの漁獲量変動  
（上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協）

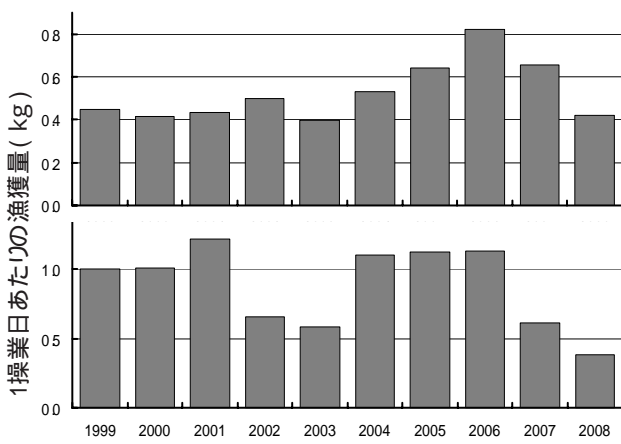


図3 小底によるヒラメの漁獲量変動  
（上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協）

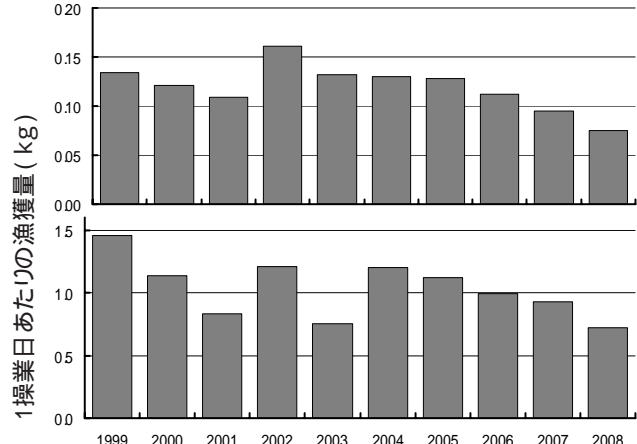


図5 小底によるクルマエビの漁獲量変動  
（上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協）

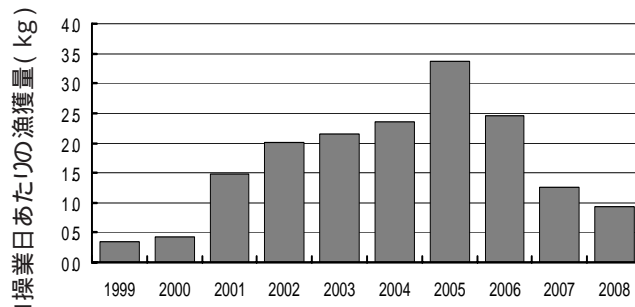


図6 徳島市漁協の小底によるガザミの漁獲量変動